

石屋根の民家と古生層地帯

齋藤 功

凱戦門やモンパルナスタワーから見ると、パリの旧市街は建物規制のせいか、5～6階建ての建物の屋根裏部屋がつけられた、台形の石造りのアパートマンが多かった。フランスの安価なホテルに泊まるとこの種の斜めの梁の削き出した天井部屋に通されることが多い。しかし、これら旧市街の建物の屋根は、暗青灰色の粘板岩で葺かれており、落ち着いたたたずまいを感じさせる。この印象はノルマンデーの田舎の民家をみたり、小都市バイユーやサンマローに泊まった時も同じであった。両都市は第2次世界大戦の激戦地であったにもかかわらず、戦後復興に力を注ぎ古都を思わせる落ち着いた都市景観を復元させたものだという。この落ち着いたたたずまいは、多分に粘板岩の屋根によるものであろうと思われた。

フランスの粘板岩の屋根は、日本の気仙沼から千厩の間にみられる美しい粘板岩の屋根に類似している。ここの民家も落ち着いたたたずまいで、思わず車を止めて写真を撮った記憶がある。聞けば、東京駅を象徴するの四角錐形の屋根もこの粘板岩で葺かれているという。

ところで、粘板岩の石屋根は四国の祖谷など中央構造線に沿った地域にみられたものであるが、現在ほとんどみかけなくなった。ブナ帯研究の一環として、台湾の中央山地の梨山周辺を調査し、中央構造線に沿った旧高砂族（山地同胞）の集落環山を訪れた際、現地の婦人が話題のなかで「かつて民家は皆スレートで葺かれていた」といわれた。「スレートとはなにか」と尋ねたら「石板石のことよ」と日本語で答えられた。人造のスレート瓦に慣れた私には、先の粘板岩が本来のスレートであったことを連想できなかったのである。しかし、ここで粘板岩の屋根は地質構造線と古生層地

帯に一致するらしいことが類推された。このことはフィリピンの高原保養都市バギオと山岳州を訪れ、地質調査所のジープで山岳道路を走った時にもある程度確認された。

昨年の夏休みに3週間余りインドを訪れた。高原保養都市の嚆矢シムラから「野猿」の架かる峡谷、リンゴ園の多い盆地などを経てヒマラヤ山麓の現代の保養都市マラニに行く途中にも（軽井沢から犀川丘陵を通り松本盆地を経由して上高地に行くのに類似）、天然のスレートで葺かれた民家が多かった。しかも、ヒマラヤ山麓に近づくにつれて粘板岩の屋根の厚さが増して行き、形も定型ではなくなってきた。植生が垂直的に変化する3,650mのロータン峠へのツアーでみた峠下集落(3,100m)を別にしても、氷河の融雪水を集めた谷川の最奥の集落における出梁造りの民家の粘板岩の屋根の厚さは、積雪の影響かもしれないが4～5cmに及んだ。したがって、粘板岩の厚さは都市から離れ僻村へ向かうほど厚くなり、粘板岩の厚さと葺き方は都市化の度合いを反映するのではないかと思われた。

英国英語でヒルステーションと呼ばれる高原保養都市は、熱帯においてマラリアの感染のない標高の高いところに位置するため、リンゴ、ナシ、モモ、スモモなどの落葉果樹やキャベツ、バレイショ、ニンジンなどの温帯起源の野菜栽培で共通性を有するが、それは斜面でも耕作しうる古生層の生産力の高さに起因するのかもしれない。地理学分野では現在、「古生層地帯」とか「第三紀地帯」などという自然と人間活動の融合した総合研究が望まれているのではないかという、はかない夢を抱いた次第である。